

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：情報メディア学科

資格：教授

氏名：藤本 憲一

研究分野	研究内容のキーワード
情報美学, メディア環境論, 人間科学基礎論, 嗜好品哲学, 睡眠文化論	「ながら」モビリズム (Nagara Mobilism), テリトリー・マシン (Territory Machine), モバイル・メディア・リテラシー (Mobile Media Literacy)
学位	最終学歴
学術修士, 社会学士	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期 (修士) 課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 無印都市の社会学---どこにでもある日常空間をフィールドワークする	2013年8月30日	社会学のレポートや卒論を書こうとする初学者向けのフィールドワーク教科書として、大学を超えて関心を共有する共同研究・教育の人脈を通じて、共著を執筆した。当方は、自らの専門現場である「コンビニ」を対象とした参与観察・都市計画・理論考察体験をもとに、平易かつ具体的に論じた。
2. よくわかる観光社会学	2011年4月25日	社会学・観光学のレポートや卒論を書こうとする初学者向けのフィールドワーク教科書として、大学を超えて関心を共有する共同研究・教育の人脈を通じて、共著を執筆した。当方は、自らの専門現場である「テーマパーク・遊園地」を対象とした参与観察・都市計画・理論考察体験をもとに、平易かつ具体的に論じた。
3. 質的調査の方法----都市・文化・メディアの感じ方	2010年02月	社会調査士の資格養成をおこなえる標準的な教科書として、大学を超えて関心を共有する共同研究・教育の人脈を通じて、共著を執筆した。当方は、自らの専門領域である質的調査法、とくに「生活財生態学」の手法を具体的に論じた。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 教員免許 (社会科) 中学高校2級	1983年03月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月日	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 低炭素社会における「カワイイ移動体」とその有効性に関する研究 ~A Study on the KAWAII-Vehicle and its Relevance to the Low Carbon Society~	共	2014年3月31日	公益財団法人 日産財団による2011-13年度研究助成 (研究代表 工藤保則/龍谷大学) に基づく研究調査報告書 ⇒ <a href="http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011">http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011</a>	低炭素社会において主役となるであろう「あらたな移動体」は、そのかたち・デザインは現在のものとは変わってくるように思われる。他のものに先んじてデザインの変化があった電車には「カワイイ」ものもあられ、電車マニア以外にも「乗りもの」としての楽しさ、「乗ること」の楽しさを与え、さらには地域の変化までうんでいる。またこの「カワイイ」という感性は、現在、デザインや建築の分野において特に注目されるものであり、その重要性は他分野へも広がってきている。 本研究では電車の事例等にも学びながら、このあらたな「カワイイ移動体」について、「ものと人の社会学」的見地から、また「情報美学・生活美学」的見地から実証的な研究を行う。同時に、自己-他者間の、また自己言及的なコミュニケーションとも深くかかわる「カワイイ」という美意識そのものについても考えていく。
2. 無印都市の社会学---どこにでも	共	2013年	法律文化社	藤本憲一は、「コンビニ---人見知りどうしが集う給

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
ある日常空間をフィールドワークする				水所」の章を分担執筆。 pdf⇒ <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fujimoto101_1.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fujimoto101_1.pdf</a>
3. 時代を変える 発想の作り方。	共	2012年3月12日	NHKらいじんぐ産?追跡!につぼん産業史制作班 編 アスコム	藤本憲一は、対談参加者として、対談「ポケベルは日本の伝統文化も引き継いだ」(vs佐藤可士和氏) → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m89/fujimoto89.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m89/fujimoto89.pdf</a>
4. 『第一回プレシンポジウム記録』	共	2012年10月23日	武庫川女子大学 生活美学研究所	藤本憲一はシンポジストとして、「生活美学の現在から未来に向かって」(角野幸博・横川公子ほか各氏とともに)。 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m88/fujimoto88.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m88/fujimoto88.pdf</a>
5. ケータイ社会論	共	2012年	有斐閣	藤本憲一の分担執筆は、『「ケータイの流行と”モバイル”の変容」 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m90/fujimoto90_2.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m90/fujimoto90_2.pdf</a> エッセイとして、「映像の中のケータイ」「アート・オブジェ/ツールとしてのケータイ」
6. 生活の美学を探る(「生活環境学の知」を考えるシリーズ1)	共	2012年	光生館	藤本憲一の分担執筆は、『「モバイル」のデザインと美学——ポケベル・ケータイの四半世紀の変遷』。
7. 『Renaissance Symposium '10 秋 シンポジウム記録』	共	2011年11月15日	武庫川女子大学 生活美学研究所	藤本憲一はシンポジストとして、「味の伝統とサイエンス」(伏木亨・大西睦子・高田公理各氏とともに)。 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m87/fujimoto87.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m87/fujimoto87.pdf</a>
8. よくわかる観光社会学	共	2011年	ミネルヴァ書房	藤本憲一は、「テーマパーク・遊園地」の章を分担執筆。
9. 質的調査の方法——都市・文化・メディアの感じ方	共	2010年02月	法律文化社	工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元ほか 藤本憲一の分担執筆は、第10章「生活財生態学法——アートと日記をフィールドワークする」
10. モノ・財・空間を創出した人々(20世紀の千人③)	共	1995年03月	朝日新聞社	高田・他17名 「関一」(政治家)を経営ビジネス論・都市空間論から論じた。「ブルーノ・タウト」(建築家)を、経営ビジネス論・都市空間論から論じた。「村野藤吾」(建築家)を、経営ビジネス論・都市空間論から論じた。「バックミンスター・フラー」(建築思想家)を、プレゼンテーション論・都市空間論から論じた。「盛田昭夫」(経営者)を、経営ビジネス論・サウンドスケープ論から論じた。「クリストファー・アレグザンダー」(建築思想家)を、プレゼンテーション論・都市空間論から論じた。(pp. 78-81、98-101、178-181、198-201、346-349、386-389)
11. メディア社会の旗手たち(20世紀の千人⑥)	共	1995年02月	朝日新聞社	高田・他21人 「藤田嗣治」(画家)、「ジャン・ヴィゴ」(映画監督)、「ジャクソン・ポロック」(画家)、「ジョン・ケージ」(音楽家)、「マリア・カラス」(オペラ歌手)、「ピーター・ブルック」(脚本家・演出家)を、メディア論・都市空間論・プレゼンテーション論から論じた。「武満徹」(音楽家)を、サウンドスケープ論・五感論から論じた。「ブライム・エッセー/音の渦、イルカの耳、パーセプション・サーカス」は、本巻に掲載された100人のメディア人について総括した。(pp. 102-105、p. 250-253、pp. 282-285、pp. 286-289、pp. 310-313、pp. 318-321、pp. 354-357、pp. 414-417)
12. 世紀の巨人・虚人(20世紀の千人①)	共	1995年01月	朝日新聞社	高田・他27人 「アンリ・マティス」(画家)を、メディア論・五感論から論じた。「ル・コルビュジエ」(建築家)を、都市空間論・プレゼンテーション論から論じた。「本田宗一郎」(経営者)を、経営ビジネス論・サウンドスケープ論から論じた。(pp. 70-73、p. 178-181、pp. 98-301)
13. 家庭機能の外部化に関する社会文化史的アプローチ	共	1994年12月	文部省科学研究費補助金報告書(課題番号05808006)	森谷・平松・角野・藤本 本共同研究では、遊宴・宿泊・ホスピタリティ・食事など、いろいろな分野から家庭機能の外部化を論じた。とくに藤本の分担箇所では、「食事機能の外部化」を経営ビジネス論・都市空間論から論じた。(pp. 38-53)
14. 大阪情報発信100年	共	1994年05月	CDI	小松・高田・井上・津金沢・奥野・大塚・橋爪 本共同研究は、21世紀の大阪が国際都市として情報発信していくための可能性を、さまざまな角度から検討したものである。とくに藤本の分担箇所では「4つのS(School・Studio・Stage・Salon)」という視点から、かつて昭和40年代の大阪において世界

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
15. 大阪の表現力ー巨大看板から大阪 までプレゼン都市の魅力を探る	共	1994年04月	バルコ出版	に類をみない革新的な美術運動であった「具体」について論じた。その先進性を「マイクロメディアとしての学校」として、現在の大阪における情報発信・プレゼンテーションのあり方のモデルとして提示した。(pp.52-64) 角野・藤本・橋爪・伊東 4人の編集委員の分担に基づく編集企画に沿って、メディア・人間・空間・広告の4パートに関する数度にわたる研究会を実施。その研究会議事録を4人の文責によって文章化した。また、4人各自の書き下ろし論稿を収録した。従来、ことばやみぶりに基づく人間の記号活動やネットワーク活動は、送り手と受け手の双方向型コミュニケーションのモデルによって捉えられてきた。これに対して、現代都市の表現形態における送り手は、特定の受け手を想定せず、不特定多数に向けた一方通行的な、プレゼンテーションのモデルに従っている。この新しいモデルの特徴について検討した。(pp.210-229)
16. 「喜志地区街づくりに関する調査 報告書」	単	1990年07月	富田林市商工観光課	富田林市からの委託研究に対する調査報告書。近鉄・喜志駅前地区の生活・商業環境の活性化と、大阪芸大をはじめとする近隣大学のキャンパス環境の整備を軸とした「キャンバスタウン構想」を提案。特に、視覚情報論の観点に立った消費行動分析および、商業ディスプレイ分析、情報サービス業種営業時間のタイムシフト行動分析をおこなった。また大学生と地元商店主間の世代間コミュニケーションを実現するべく地域ネットワークの可能性を検討した。(pp.1-104)
17. 「大阪府の環境の将来像」	共	1990年05月	アクセス研究所	則光・藤本・B.バレット 大阪府環境部からの委託研究に対する調査報告書。一面的な「環境規制型施策」になることなく、「持続的な開発sustainable development」の可能性を論じるとともに、都市環境と自然環境の調和を目指す「アーバン・エコトピア」構想を策定。特に、社会調査の手法として「デルファイ法」を採用し、イメージと世論両面の有識者・一般アンケートを実施。ビジョン策定の基礎とした。(部分的に大阪府環境施策として採用) 分担 藤本 (pp.48-59, pp.65-71, pp.75-86)
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
1. ながらスマホでファッションフ ード、ときどきお菓子作り、常時お しゃべり	単	2014年2月1 日	『vesta』(食文化誌ヴ ェスタ)no.93 公益財団法人・味の素 食の文化センター	若者の食行動における写真・web・アプリなどのメ ディア文化を記述、分析した。 pdf⇒ http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m104/fuji moto104_1.pdf
2. MUSMEEからGYARUへ-----” 逆輸入 ” ジャポニズムの系譜	単	2013年5月1 日	日本ヴィクトリア朝文 化研究学会 (VSSJ) 会報 no.12	GYARU表象の全世界的流行など、クールジャパンと称 される日本文化の世界発信の先駆として、19世紀ヴ ィクトリア朝におけるMUSMEE表象の流行を展望した 。⇒ http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m99/fu jimoto99.pdf VSSJ⇒ http://www.vssj.jp/
3. コンビニ---人見知りどうしが集 う給水所	単	2013年	近森高明・工藤保則編 『無印都市の社会学--- どこにでもある日常空 間をフィールドワーク する』法律文化社 所 収	コンビニエンス・ストアを商業施設としてだけでな く、コミュニケーションやメディアの観点から、生 活美学・情報美学的に論じた。 pdf⇒ http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fuji moto101_1.pdf
4. SHIKOHINの距離学 ---若者の” ソトごもり”の謎を解く	単	2013年	『TASC MONTHLY』No.4 54 財団法人 たばこ 総合研究センター	カフェやコンビニ、公衆トイレなど、公共空間にお ける若者の「ソトごもり」現象を、ホールの「プロ クセミクス」や、ゴフマンの「関与シールド」の観 点から記述、分析した。 pdf⇒ http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fuji moto101_2.pdf
5. やせがまん哲学徒時代---石毛直 道『食事の文明論』(1982)の頃	単	2013年	『石毛直道さんとわた し---石毛直道著作集出 版記念』ドメス出版 所収	石毛直道『食事の文明論』(1982)の先駆性を論じ た。
6. 「モバイル」のデザインと美学--- ポケベル・ケータイの四半世紀 の変遷	単	2012年	横川公子編『生活の美 学を探る(「生活環境 学の知」を考えるシリ ーズ1)』 光生館 所収	ポケベルやケータイを、生活美学・情報美学的観点 から、クロニクル的に記述、分析した。 → http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m94/f ujimoto94.pdf

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
7. ”かわいい”×”モバイル”情報 美学の進化論	単	2011年3月31 日	『情報美学研究』第3号 生活美学研究所	21世紀をリードする「かわいい」概念と、「モバイル」概念の接点を、それぞれの原史に立ち返り、情報美学の観点から展望した。 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m84/f-1107r.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m84/f-1107r.pdf</a>
8. テーマパーク・遊園地	単	2011年	『よくわかる観光社会学』 (安村 克己・堀野 正人・遠藤 英樹・寺岡 伸悟編) ミネルヴァ書房	テーマパークや遊園地を、扉で閉ざされた商業空間や都市空間として記述、分析した。 → <a href="http://www.minervashobo.co.jp/book/b86787.html">http://www.minervashobo.co.jp/book/b86787.html</a>
9. SHIKOHINをめぐる哲学ふう嬉遊曲 ?嗜好品研究のパラダイム転換	単	2010年8月1 日	『TASC Monthly』no.4 16 財団法人たばこ総合研究センター	嗜好品の新しい見方を、パスカル主義と栄養主義という二つのドグマに対抗するパラダイムとして哲学的に論じ、同時に「嬉遊曲」という音楽の精神との共鳴点を論じた。 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m77/fujimoto.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m77/fujimoto.pdf</a>
10. Nagara—Mobilism in the Clutches of Cutie Mobs’	単	2010年	“Welt in der Hand” (YOSHIDA, M et al. eds.) Spector Books, Leipzig	ドイツ語対訳 ‘Nagara—Mobilismus in den Handen der Cutie Mobs’ を同時収録 → <a href="http://www.spectorbooks.com/">http://www.spectorbooks.com/</a>
11. たゆたう「両岸都市」—大阪・水の百景100年	単	1995年04月	まほら（旅の文化研究所紀要）3号17-20頁	観光産業は、21世紀最大のビジネス資源である。ファッション・アメニティ・エコロジーという3つの魅力を満たす究極の平和産業であり、都市と地方の区別なく創造的な街づくりを促すビジネス・インセンティブである。とくに大阪は、これまで工業都市・商業都市のイメージが強かったが、幕末までは「水の都」とよばれる一大観光都市であった。当時の観光案内『淀川両岸一覽』を中心に、近代以前の大阪の都市魅力を考察し、未来の大阪における観光ビジネスの可能性を展望した。
12. 近未来観光都市「大雑花」	単	1995年03月	21世紀大阪まちづくり フォーラム1994 20-21 頁	未来の大阪における観光ビジネスの可能性を、近未来観光都市「大雑花」という新しいネーミング・コンセプトから論じた。大阪は、これまで工業都市・商業都市のイメージが強かったが、21世紀は、観光が最大のビジネス資源となる時代である。たとえば日本橋電気街のように、街全体が産業史ミュージアムであるような大阪の都市魅力を考察しつつ、その将来像をも展望した。
13. 「指針情報」足りなかった—大震災、「どう行動すれば」	単	1995年02月	朝日新聞社	情報には「事実情報」と「指針情報」があり、過去・現在に起こった事柄を確実に伝えるのが「事実情報」で、正確な情報にもとづいた上で次はどう行動したらよいか、一人ひとりにとつてのアドバイスを与えるのが「指針情報」である。このどちらが欠けても、被災地における緊急行動に重大な障害が生じてしまう。本論文では、被災者どうしのクチコミによる情報交換の重要性を説き、そのための自前の情報発信メディア構築の具体的な方策を提案した。そのうち、緊急時に暗証番号ひとつで伝言をたがいに取り出し合えるボイスメール機能の提案については、NTTに全面的に採用された。
14. 「さわり」身にまとう美学—スウォッチ・コルク靴・ライブ	単	1994年08月	朝日新聞社	現代の若者のファッション・風俗について、メディア論・プレゼンテーション論・五感論の立場から論じた。従来のTPOから逸脱した腕時計・Tシャツ・コルク靴・プレスレット・プロミスリング等の着装について、とくに「さわり」の美学という触覚メディア環境論から分析した。近代社会において触覚は、「劣等感覚」とみなされてきたが、現代人のプレゼンテーション行動においては非常に大きなウェイトを占めている。同じくノイズ・ミュージックのライブに集まる若者の行動についても、「さわり」の美学から解明した。
15. コンプレックス・プラスティコー腕とSWATCHの人体論	単	1994年04月	『年報 現代風俗』17 巻	人間の空間認知図式において、腕という部位は、重力方向の垂直軸とは別に、水平方向のラテラルティ（側面性）を感覚的に認知する部位である。それは、右脳と左脳のラテラルティ（側面性）と、密接な相互補完関係をもっている。また、金属アレルギーの蔓延により、腕の装身具である時計やプレスレット等のプラスチック化が進行しているが、この比較文明論的意義についても考究した。（pp. 218-231）
16. 風はなぜ吹く、なぜなしに吹く— 「SWATCHの原生時間論」覚書	単	1994年03月	武庫川女子大学生活美学研究所紀要 3号	本格的な労働時間短縮、余暇拡大時代を迎え、人々の時間意識は大きく変容しつつある。この中で、ニュートンによって定式化された「線型時間」に代わって、より原初的な時間意識である「原生時間」が生まれつつある。哲学的・社会学的な時間論の課題について、スイス製腕時計SWATCHの流行現象から考究した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
17. SWATCHISSIMO (スウォッチ革命) ー腕時計のファッション化をめぐる諸相	単	1994年01月	ファッション環境 3 巻・	メディア・テックの分野では、今や腕時計が時を告げる機械から、衣服や装身具等のファッション環境の一部となり、21世紀には、携帯電話やパソコン・ネットワークの機能をもあわせもった、携帯型マルチメディア・ツールとなることが予想されている。この可能性につき、スイス製腕時計SWATCHの流行現象から考究した。
18. 「同心円モデル」に基づく家イメージの分析ー「メディア環境」としての家 (第2報)	単	1993年09月	ファッション環境 3 巻・	家を体感環境型の「パーソナル・マルチメディア」として捉え、「同心円モデル」によるアンケート調査に基づき、そのイメージを分析した。すなわち、家の象徴的な中心機能を内円として、共有部分を中円として、私有部分を外円として記号化し、現代核家族の三層的なメディア構造を解明した。本研究は一部、平成5年度文部省科学研究費補助金/課題番号05858005の補助を受けている。
19. 時間をシャッフルする都市ーSWATCHをめぐる都市論	単	1993年09月	都市問題研究 45巻	現代都市のネットワーク構造は、生活の24時間が進行する中で、昼と夜の時間軸に添って急速に変容しつつある。とくに夜間時間帯における人間関係や、人とインフラストラクチャー、サービスとの関係は、ますます複雑化している。時間軸をかきまぜ、再配分するという都市空間のシャッフル機能のあり方を検討した。
20. 家概念の「メディア論的転回」に関する方法論的考察ー「メディア環境」としての家 (第一報)	単	1993年05月	ファッション環境 3 巻・	家概念を「メディア環境」という概念によって基礎づける方法論的な考察をおこない、家政学を中心とする従来の家研究に対して、あらたに生活情報論的な視座の導入をはかった。家をめぐる家庭内景観の急速な変貌、定住と移動をめぐるライフスタイルの変化などを整理したうえで、今日的な「家」の実相に迫る学際的方法論構築に向けた試論である。特に室内の「モノの集合体」を媒介にして、家族成員が無意識的なメッセージのやりとりをおこなう「メディア反射型コミュニケーション」に注目し、考察をおこなった。
21. 「人間とコンピュータのネットワーク分析ー認知社会心理学モデルによる流行研究」	単	1993年03月	「ライフサイエンス」v ol.20-4	複雑な人間社会のネットワーク行動を、コンピュータ・ネットワークのメタファーに基づく認知科学(狭義には認知社会心理学)的モデルによって解明する、科学方法論的考察をおこなった。その一例として色やファッションの流行現象を取り上げ、調査研究者(マーケッター/クリエイター)と被験者(インフォーマント/ユーザー)とが、感性情報を相互に送受信する回帰的なフィードバック・ループを成し、高度なメディア・ネットワークを形成している点を論じた。特に行動主義・内観主義両モデルの難点を指摘し、それに代わる「回帰デルファイ法」的な認知社会心理学モデルの有効性を論じた。(pp.44?47)
22. 「文法の自律性について」	単	1985年03月	大阪大学	N. チョムスキーとW. クワインの言語論・コミュニケーション論を哲学的・科学基礎論的観点から考察。言語の本質を「自己の主観的思考の個人的表現とみるチョムスキーと、対照的に「間主観的なコミュニケーション」とみるクワインの立場を整理し、哲学・科学基礎論上の「合理論対経験論」の対立と比較して論じた。特に言語や理論の「翻訳不確定性テーゼ」と「文法の自律性テーゼ」との争点を検討した。(pp.1?256)

その他

1. 学会ゲストスピーカー

1. 「寝室地図」調査法から、「眠主(みんしゅ)」的な「ねむりの哲学」構築へ(日本睡眠環境学会@奈良女子大学)	単	2012年8月23日	日本睡眠環境学会 第21回 学術大会「 寝室環境と寝ごこち」	睡眠に関する文化・社会的研究の事例紹介から、従来の自然科学的アプローチ一辺倒であった睡眠研究に対する、まったく別の文化的・哲学的な睡眠研究アプローチを提示した。
2. 「古今東西、カルチャーに貴賤なし! ?-----サブカルチャーとブリティッシュ・アイデンティティ」(日本ヴィクトリア朝文化研究会@大東文化大学)	単	2009年11月	日本ヴィクトリア朝文化研究会 第9回 全国大会	古今東西、カルチャーに貴賤なし! ?-----サブカルチャーとブリティッシュ・アイデンティティ

2. 学会発表

1. 「関与シールドとしてのケータイ---出会い戦略におけるオン/オフの転機機」 モバイルコミュニケーション研究会報告	単	2013年6月23日	情報通信学会第30回 大会 東洋大学	公益財団法人 情報通信学会 大会 ⇒ <a href="http://www.jotsugakkai.or.jp/doc/taikai2013/program2013.pdf">http://www.jotsugakkai.or.jp/doc/taikai2013/program2013.pdf</a> モバイルコミュニケーション研究会 ⇒ <a href="http://www.jotsugakkai.or.jp/operation/study/mobilecom.html">http://www.jotsugakkai.or.jp/operation/study/mobilecom.html</a>
2. モバイル・コミュニケーション研究会・部会報告	共	2012年6月24日	第29回 情報通信学会 大会 国際教養大学	→ <a href="http://www.jotsugakkai.or.jp/operation/taikai/29tai-kenkyukai.html">http://www.jotsugakkai.or.jp/operation/taikai/29tai-kenkyukai.html</a>
3. SHIKOHINをめぐる哲学ふう嬉遊曲	単	2009年05月	嗜好品文化研究会 (	日本固有の「嗜好品」概念から、全世界に通用する

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
—嗜好品研究のパラダイム転換				
4. 非脳非心論—SWATCHをめぐる人体論	単	1993年09月	第7回嗜好品フォーラム・キャンパスプラザ(京都) 現代風俗研究会	”SHIKOHIN”概念への転換を提案する、哲学的な発表。「嬉遊曲」divertimentoという音楽上のジャンルを手掛かりに、全領域的な考察を行った。
5. SWATCHISSIMO (スウォッチシモ)—腕時計のファッション化について	単	1993年06月	ファッション環境学会	人間の空間認知図式において、腕という部位は、重力方向の垂直軸とは別に、水平方向のラテラリティ(側面性)を感覚的に認知する部位である。それは右脳と左脳のラテラリティ(側面性)と、密接な相互補完関係をもっている。また、金属アレルギーの蔓延により、腕の装身具である時計やブレスレット等のプラスチック化が進行しているが、この比較文明的意義についても考究した。 メディア・テックの分野では、今や腕時計が時を告げる機械から、衣服や装身具等のファッション環境の一部となり、21世紀には、携帯電話やポケットベル、ひいてはパソコン・ネットワークの機能をもあわせもった、携帯型マルチメディア・ツールとなることが予想されている。この可能性につき、スイス製腕時計SWATCHの流行現象から考究した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績</b>				
1. フィールドワーク調査 台湾・台北	共	2014年3月25日@三日間	公益財団法人 日産財団による2012-13年度研究助成(研究代表 工藤保則/龍谷大学)に基づく委託調査 ⇒ <a href="http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library/02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011">http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library/02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011</a>	日本発「かわいい」文化のグローバルな展開事例として、アジアを代表する先端的な情報発信拠点としての台北における流行文化(移動体・雑貨・ファッションなど)に関するフィールドワーク調査。
2. フィールドワーク調査 中国・香港	共	2013年3月4日@三日間	公益財団法人 日産財団による2011-12年度研究助成(研究代表 工藤保則/龍谷大学)に基づく委託調査 ⇒ <a href="http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library/02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011">http://www.nissan-zaidan.or.jp/kenkyu/library/02_a2006.php?y=2011&amp;f=1974&amp;t=2011</a>	西洋的デザイン美学(イギリスを中心とした)と、東洋的デザイン美学(中国を中心とした)との交差する接点としての要衝としての「ポスト・コロニアル都市」香港における移動体・建築・ファッションなど、現代の折衷的意匠に関するフィールドワーク調査。
3. 美術展 『I'm so sleepy どうにも眠くなる展覧会』	共	2012年3月	主催:公益財団法人せたがや文化財団 生活工房 特別協力:NPO法人睡眠文化研究会	NPO法人睡眠文化研究会 理事として、展示・講演・シンポジウムに特別協力。
4. 美術展 『手の中の世界---グローバル時代の日常文化としての携帯電話に関する現代美術・映像・議論』 ”WELT IN DER HAND---Gegenwartskunst, Filme, Gespräche - zur globalen Alltagskultur des Mobiltelefons”		2010年03月		美術展のコンセプト・カタログへの紙上参加。 → <a href="http://www.kunsthau Dresden.de/?lang=2010">http://www.kunsthau Dresden.de/?lang=2010</a> 年中に単行本(英独対訳)として出版見込。 → <a href="http://www.spectorbooks.com/">http://www.spectorbooks.com/</a>
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 講演 嗜好品・中食・タイムシフト---メディアとしてのコンビニと、若者の消費行動	単	2013年	財団法人 日本食生活文化財団 特別研修会	
2. 講演 SHIKOHINの距離学---人見知り現代人の社交ツール	単	2013年	「第11回嗜好品文化フォーラム」基調講演@京都新聞文化ホール	→ <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m98/fujimoto98.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m98/fujimoto98.pdf</a> → <a href="http://www.cdij.org/shikohin/">http://www.cdij.org/shikohin/</a>
3. 講演 SURIMI&SURIKOMI---習慣の力と若者の力	単	2013年	大蒲青年会50周年記念総会@大阪・堂島ホテル	
4. ディスカッション 料理すること---その変容と社会性	共	2013年	森枝卓士編『料理すること---その変容と社会性/食の文化フォーラム31』ドメス出版 所収	pdf⇒ <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fujimoto101_4.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m101/fujimoto101_4.pdf</a>
5. 講演 睡眠の文化論	単	2012年7月	京都大学 吉田キャンパス稲盛財団記念館 「睡眠文化論」(大学コンソーシアム京都)	→ <a href="http://sleepculture.net/lectures.html#kyoudai">http://sleepculture.net/lectures.html#kyoudai</a>
6. 講演 嗜好品研究の新しいカテゴリー	単	2012年6月	ネスレ日本株式会社 マーケティング情報部@神戸市	
7. シンポジウム 「嗜好品と社会規	共	2012年5月	京都仁和寺・御室会館	→ <a href="http://www.cdij.org/shikohin/">http://www.cdij.org/shikohin/</a>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
「範」			「第10回 嗜好品文化フォーラム」 藤本憲一ほか4名	
8. 講演 眠りの文化とは何か	単	2012年3月	三軒茶屋 キャロットタワー	→ <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m90/fujimoto90_1.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m90/fujimoto90_1.pdf</a>
9. 講演 眠り小物の文化論・科学論	単	2012年11月	立教大学・池袋キャンパス 「睡眠の文化を考える」(全学共通カリキュラム)	→ <a href="http://www.rikkyo.ac.jp/feature/featured_classes/2009/05/post-173.html">http://www.rikkyo.ac.jp/feature/featured_classes/2009/05/post-173.html</a>
10. コメント 「睡眠を学習-----寝かせない!? 大学講義人気」	共	2011年7月30日	『東京新聞』2011年7月30日 生活面記事	→ <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m85/fujimoto85.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m85/fujimoto85.pdf</a>
11. 観光とコンピューティング国際シンポジウム「観光の今、そして伝統から未来」	共	2011年6月22日	京都大学大学院情報学研究科 (財)京都高度技術研究所・京都リサーチパーク(株)共催 京都リサーチパーク	シンポジスト(オーガナイザー)として参加。 バーチャルラボ「観光とコンピューティング京都研究所」 → <a href="http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism">http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism</a> → <a href="http://www.krp.co.jp/sangaku/ict/tourism-sympo/">http://www.krp.co.jp/sangaku/ict/tourism-sympo/</a>
12. インタビュー ” Building a New Tourism Strategy with [Traditional Culture] Embedded in	単	2010年9月	KYOTO LABORATORY for TOURISM and COMPUTING (Virtual Lab)	→ <a href="http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism_en/research/r_kenkyu3">http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism_en/research/r_kenkyu3</a>
13. インタビュー 「伝統文化を埋め込んだ」ケータイで、新たな観光戦略構築を復興させる	単	2010年9月	バーチャル・ラボ「観光とコンピューティング京都研究所」 企画運営・京都大学大学院情報学研究科他	→ <a href="http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism/research/r_kenkyu3">http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism/research/r_kenkyu3</a>
14. 講演 「嗜好品研究の新しい展望?質的調査法とくにフィールドワークを中心に」	単	2010年10月	快情動科学研究会 都市センターホテル	
15. コラム 藤本憲一「『情報幕の内弁当』が命」 『朝日新聞』2009年4月19日夕刊		2009年		
16. <INTERVIEW> Building a new tourism strategy with “traditional culture” embedded in mobile phones [Nagara Mobilism] revives Japan’s sightseeing culture		2009年		
17. コメント 「歩き食べ族増殖中-----目立つ若者、趣味を優先、時間節約」 『日経新聞』(全国版・生活面)夕刊 2009年7月28日 → <a href="http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m68/fujimoto.pdf">http://www.mukogawa-u.ac.jp/~hi/ognet/m68/fujimoto.pdf</a>		2009年		
18. 入試出題(横国大・前総2009英語長文) Kenichi FUJIMOTO” Nagara Mobilism and Japanese Tradition” (The Third-Stage Paradigm: Territory Machines from the Girls’ Pager Revolution to the Mobile Aesthetics)		2009年		
19. これからは情報インフラの整備を一駅・小学校・そして街に 会報・都市協 132号8頁		1994年		
20. レトロ・レストラン街を抜けると、そこは360°の夜景パノラマだった! 月刊『アクロス』20巻3号に掲載(パルコ出版)(PP. 18-19)		1993年		
21. 「音と光のディストピアメディア・テックのにぎやかな未来」 『最適化社会の研究Ⅲ』所収 ヒューマンルネッサンス研究所		1992年		
22. 「ソラリスの海へー透明な環境としてのコンピュータ」 『最適化社会の研究Ⅲ』所収 ヒューマンルネッサンス研究所		1992年		
23. 「斉一説と激変説」(後) 「ライフサイエンス」 vol. 16-3		1992年		
24. 「斉一説と激変説」(中) 「ライフサイエンス」 vol. 15-10		1992年		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
25. 「斉一説と激変説」 (前) 「ライフサイエンス」 vol.15-9		1992年		
26. 「サイコム・プロジェクト報告書」 アクセス研究所		1992年		
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費助成事業「現代日本社会から見たイギリス文化表象の変容分析」 (研究分担者として)	共	2012年4月1日@三年間の助成	科学研究費助成事業 (2012年~2014年) 基盤研究B・24320154・研究課題名『「ヴィクトリア朝幻想」の形成と解体』・研究代表者/井野瀬久美恵@甲南大学)	現代日本における大衆文化現象の起源の多くが、大英帝国の最盛期たるヴィクトリア朝にある点、また逆に日本の新旧の文化現象が、イギリスの文化と相互に影響し合っている点を解明する。
2. 低炭素社会における「カワイイ移動体」とその有効性に関する研究	共	2011年4月1日@三年間	公益財団法人 日産財団による研究助成事業 (2011~2013年) (研究代表者/工藤保則@龍谷大学)	低炭素社会において主役となるであろう「あらたな移動体」は、そのかたち・デザインは現在のものとは変わってくるように思われる。他のものに先んじてデザインの変化があった電車には「カワイイ」ものもあられ、電車マニア以外にも「乗りもの」としての楽しさ、「乗ること」の楽しさを与え、さらには地域の変化までうんでいる。またこの「カワイイ」という感性は、現在、デザインや建築の分野において特に注目されるものであり、その重要性は他分野へも広がってきている。 本研究では電車の事例等にも学びながら、このあらたな「カワイイ移動体」について、「ものと人の社会学」的見地から、また「情報美学・生活美学」的見地から実証的な研究を行う。同時に、自己-他者間の、また自己言及的なコミュニケーションとも深くかかわる「カワイイ」という美意識そのものについても考えていく。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	情報通信学会 (会員) (モバイル・コミュニケーション研究会・主査) 日本社会学会 (会員) 関西社会学会 (会員) バーチャルラボ「観光とコンピューティング」京都研究所 (研究員) ⇒ <a href="http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism/profile/pro3">http://www.astem.or.jp/virtual-lab/tourism/profile/pro3</a> 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 (会員) NPO法人 睡眠文化研究会 (会員) (理事) 嗜好品文化研究会 (常任委員) 現代風俗研究会 (会員)